

串田新遺跡Ⅲ

—昭和55年度環境整備に伴なう調査—

1981年3月

大門町教育委員会

目 次	I. 遺跡の位置と環境.....	1
	II. 調査に至る経緯と経過.....	2
	III. 遺 構.....	4
	IV. 遺 物.....	5
	V. ま と め.....	9

例 言	1. 本書は、昭和55年度串田新遺跡環境整備事業に伴う試掘調査の報告書である。
	2. 調査主体は、大門町教育委員会（教育長 岡本甚三）であり史跡環境整備の国庫補助を受けている。
	3. 発掘調査は、同教委主事中山修宏が担当し、昭和55年10月22日から31日まで行なった。
	4. 本書の編集、執筆は、中山修宏が行なった。
	5. 発掘調査及び出土品整理は、下記の方々の協力を得ている。謝意を表する次第である。
	久々忠義、藤原 尚、高田典子、池田文子、折橋卯一、 大坪四郎、寺本石人、山崎長太郎、田畠政美、北野博司（敬称略）

I 遺跡の位置と環境

串田新遺跡は、富山県射水郡大門町串田新の通称「大沢山」と呼ばれる独立丘陵上に所在する。大門町の中心街から南方におよそ5kmほどの位置にあり、付近は開けた田園が取り巻き、東側には和田川が蛇行しながら北上して流れている。

この「大沢山」は、標高約45~46mであり東西に約150m、南北に約450mを測る細長い形状の独立丘陵であり、平野部と約10~16mの比高差がある。「大沢山」の東側は、和田川の浸食に



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1.串田新遺跡
- 2.生源寺新遺跡
- 3.生源寺新B遺跡
- 4.大塚古墳
- 5.生源寺遺跡
- 6.ノ遺跡
- 7.小泉遺跡
- 8.島鉢田遺跡
- 9.流通業務団地内遺跡群
- 10.五歩一古墳群
- 11.宿屋古墳
- 12.上野遺跡
- 13.日ノ宮古墳群

よって急峻な崖になっており、和田川を挟んで対岸に射水丘陵が広がっている。また西側は、庄川によって形成された広大な沖積平野がひろがり、遠く高岡の二上山を望むことができる。

本遺跡は、繩文時代中期後葉を画する「串田新式」の標式遺跡としてかねてより著名であり、丘陵の北東部には古墳時代初期の墳墓と思われる墳丘が3基ある。

本遺跡の周辺の丘陵及び平野部には、各時代にわたる数多くの遺跡が存在する。繩文時代に属する遺跡は、小泉遺跡（前期）、生源寺新（中期）があり、弥生時代では、市ノ井（後期～古墳初期）、上野（後期～古墳初期）、圓山（後期）の遺跡がみられる。古墳時代初期では、にわかに集落の数が増加し市ノ井、上野遺跡で前代から継続的に営まれる他に、串田新、島鉢田、中山南などの諸遺跡があらわれる。

また、古墳及び古墳群は大塚古墳（円墳）、五歩一古墳群（前方後方墳1、円墳1）、宿屋古墳（円墳）をはじめ、山王宮古墳群や、現在調査が継続中の流通業務団地内に所在する古墳（円墳12）などがある。一方、流通業務団地内からは、古墳後期～奈良時代の須恵器窯跡が7基ほど確認されている。かって調査が行なわれた生源寺窯跡とあわせて、県内において当地域が該期の代表的な窯業地帯であったことがうかがわれる。流団地内以外の奈良時代に属する集落遺跡としては、生源寺遺跡や生源寺新B遺跡などがある。

II 調査に至る経緯と経過

昭和53年度より開始された国指定史跡「串田新遺跡」の環境整備事業は、今年度で3年目をむかえた。今年度の整備事業の主な内容は、住居址復元、炉址復元を中心とする繩文時代集落区域の整備をはじめ、便所棟建設、園路広場の整備、芝張等の植栽である。

そのなかで便所棟建設については、文化庁、県教委文化課及び串田新遺跡整備専門委員会等において協議のええ、便所棟建設に先立ち試掘調査を行ない、遺構や著しい包含層が認められない箇所を定め、そこに建てることが決まったわけである。便所棟予定地については昭和52年3月に作成した「串田新遺跡環境整備基本計画書」にもとづき、遺跡のはば南東部に定め昭和55年10月22日から5日間をかけて調査を実施したわけである。

調査の経過は、次のとおりである。

10月22日 今日より試掘を開始する。便所棟予定地を中心に、4mピッチで試掘構を設定する。実施設計での当初の便所棟予定地は、6・7区にあたる。この地点より若干の土師器が出土し、南西隅より落ち込みを検出する。

10月23日 6・7区にひきつづき8区を掘りはじめる。このグリッドからも土師器の破片が数多く出土し、住居址の中心部を掘っていることが判明する。

10月24日 町教育委員会内で協議の結果、便所棟予定地を8mほど西方にうつす。この地点は調査区の1～3区にあたる。2区より掘りはじめたが、竹などの根が多く作業が思うようにはか

ならない。

一方、8区の住居址についてはひきつづき精査を行なう。住居址床面から焼土のブロックが確認でき、轟台等の土器も床面から出土する。

10月30日 2区の試掘を完了し、1区及び3区を掘りはじめる。3区の東西隅に落ち込みが確認できたが、最近の搅乱であることがわかる。また、7区より検出された溝は、住居址に付随する遺構ではなく、これより以前につくられたようである。今日で7、8区の精査を完了する。

10月31日 午前中に1区及び3区の試掘を完了する。いずれも遺物がなく、遺構等についても検出できない。また、1～3区の南東側も竹藪で崖になっているため試掘ができなかつたが、遺構等はないようである。この1～3区を便所棟建設地とする。午後より遺構実測、写真撮影を行ない調査を完了する。

III 遺構

今回の試掘調査において発見された遺構は竪穴住居址1棟、溝状遺構1基、性格不明の土塹1基である。

1. 住居址

今回の調査では、全体の約3分の2ほど発掘したが、円形に近い隅丸方形のプランを呈するものと思われる。住居址は、溝状遺構と重複しているが、層序の観察結果から、住居址の方が溝状遺構よりも若干新しいものと考えられる。

住居址の立ちあがりは、試掘構の東側で確認された。床面に対して3~5cmを測る。また、住居址の壁直下に周溝が検出されており幅10数cm、床面からの深さを3~4cm測るものである。周溝内からは、高环、甕などの土器片が出土しており、これらは住居址の所属時期を決定する資料である。

焼土は、住居址中央部にブロック状に散乱していたが、明らかに炉址と判別できるものは、比較的厚く堆積している二つのブロックがこれにあたるようである。住居址の床面からは、8つの穴が検出されているが、そのなかで柱穴と考えられるものは2個ほどである。それを柱穴と考えれば、中央部に焼土ブロックで示される炉址を有し、4本柱の竪穴住居址であると推定できよう。ちなみに、今回発見された2個の柱穴間の距離は約3m弱を測る。なお高环、器台、甕の何点かの土器が床面上及び周溝内より発見された他は、住居址の覆土中からの出土である。

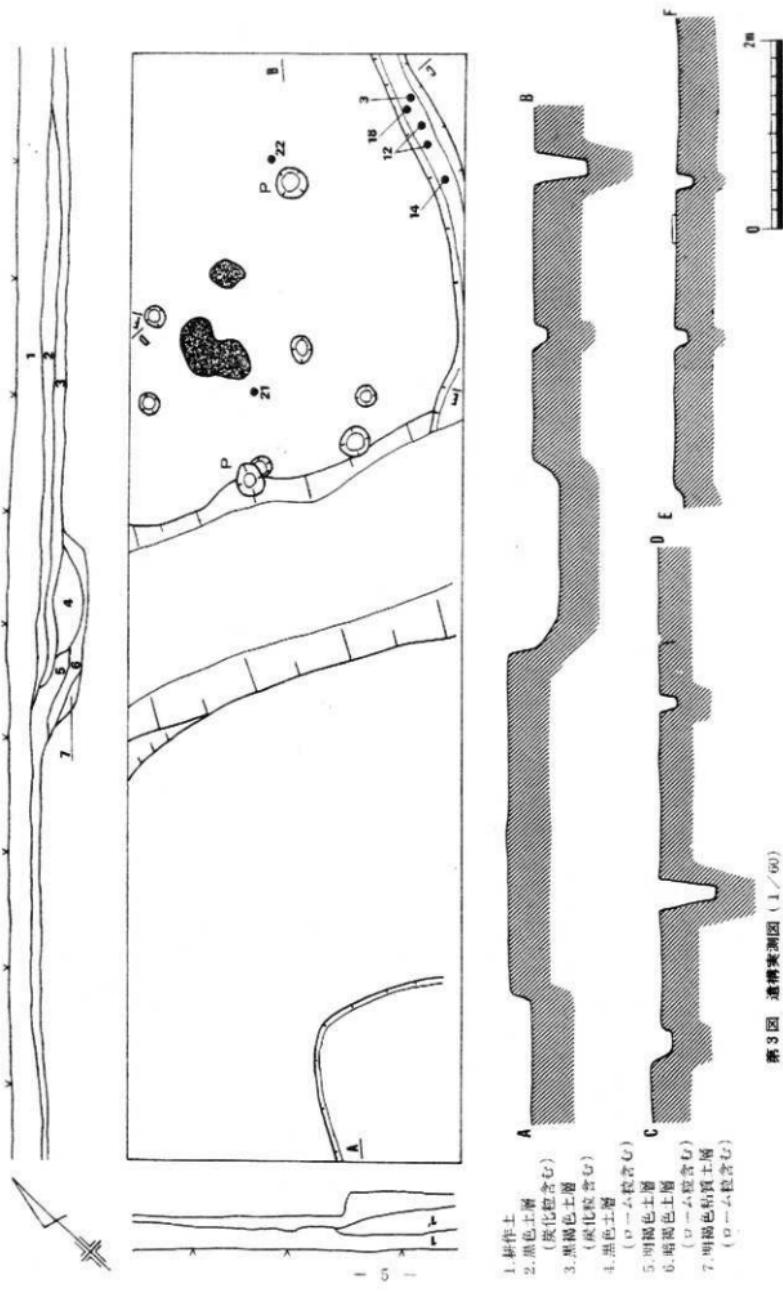
2. 溝状遺構

溝状遺構は、幅を平均2m、深さ約50cmを測り、東西方向にそってつくられている。この遺構は、おそらく台地上にきずかれた方形周溝墓の一部であろうと思われる。だが、東側の崖部まで3m弱の距離しかないため崖部にむかって“コ”の字状の形状を呈する方形周溝墓ではなかろうか。なお、溝状遺構内からは、明らかにこの遺構に伴なうと思われる遺物は出土していない。

3. 土塹

第6区の南西隅より検出された土塹で、ほぼ方形を呈するものと思われる。当初は、方形周溝墓の主体部等にあたるものと思われたが、埋没土がカカフカの状態であり割合新しい時代の所産であるようだ。ここで

第2図 遺構記置図
(1/150)



第3图 連續測量圖 (1/60)

は、その性格については保留しておきたい。なお、出土遺物はない。

IV 遺 物

出土遺物は、鉄製品1点を除いて大半が古式土器の破片であり、住居址覆土中が最も多く、床面、周溝内からも若干出土している。16は第6区明褐色土層中、21・22の器台は住居址床面、3・12・13・18は周溝内で、その他は住居址覆土中の出土である。なお、16を除いていずれも破片のみであり器形全体の観察はできない。

1. 土 器

・ 豊形土器 (1~8)

複合口縁を有する類と、口唇部に1cm前後の面取りを施し、くの字口縁を呈する類に大別できる。更に、複合口縁を有するものには口縁部に擬凹線を施すものと、口縁部を横ナナ調整等により無文にするものがあるが、後者には、頸部のくびれがあまり強くないもの(4・5・6)、口縁部が短かく頸部で強くくびれるもの(1)などの変化がみられる。また、5のように口縁部の内外面を刷毛で仕上げるものもみられる。胴部には、縦位の刷毛が観察できるものもあるが、破片が小さいためあまり明瞭ではない。いずれも内面の頸部以下は、ヘラ削りを行なうものがほとんどであり、口縁はやや外反するものが多いが、6・8のように直立気味のもある。

また、複合口縁を有する豊形土器のうち、口縁部を無文帶にする類は、胴径が口径と同じくらいか、やや上回る程であるのに対して、擬凹線を施す類は、胴径が口径をしのぎ最大径が胴部上半であり卵形の胴部になる傾向がある。くの字口縁の豊形土器は、内面頸部以下にヘラ削りを行ない、胴径が口径をしのぐ。

・ 高坏 (12~15・17~19)

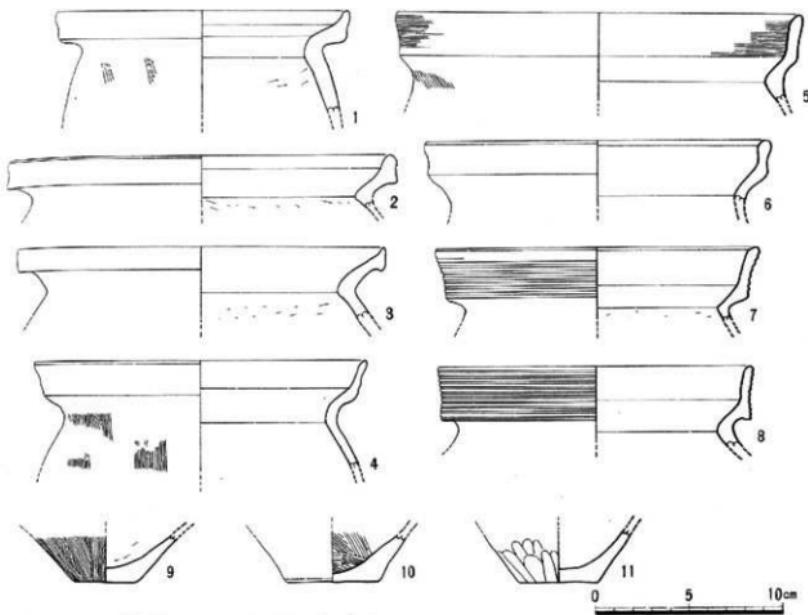
高坏は、坏部の底辺部が比較的小さく、口縁が大きくラッパ形に開くもの(13・15)とこれに比べて坏部の底辺がやや大きく、口縁がゆるやかに外反するもの(12・14)にわけられる。坏部は、いずれもヘラ磨きを施し、口辺部と底辺部の接合部に明瞭な段を有している。高坏の脚部は、ほとんどが裾部へ向ってラッパ形に外反する器形であり、有段の脚部は見られない。外面を縦方向のヘラ磨きで仕上げられ、内側には一部に刷毛目を残している。

・ 器台 (20~22)

胴部のみであり、明確に口縁部、裾部がうかがわれるものはない。21・22は、外面を縦方向の入念なヘラ磨きで仕上げられており、口縁部が大きく外反する器台であろう。

・ 鉢形土器 (16)

肥手部が欠落しているけれども、器形全体がうかがわれる土器であり、全体に丹彩を施しているようである。胎土に微細な砂粒を含み、淡褐色を呈する。口縁部外面に一条の細い沈線を施し、



第4図 出土土器実測図1 (1/3)

頸部以下はヘラ磨きで仕上げられている。内面は、横方向のヘラ磨きが施されているが、あまり明瞭ではなく、数条の縦を観察することができる。底部は、あげ底であり、把手部は1個だけであろう。

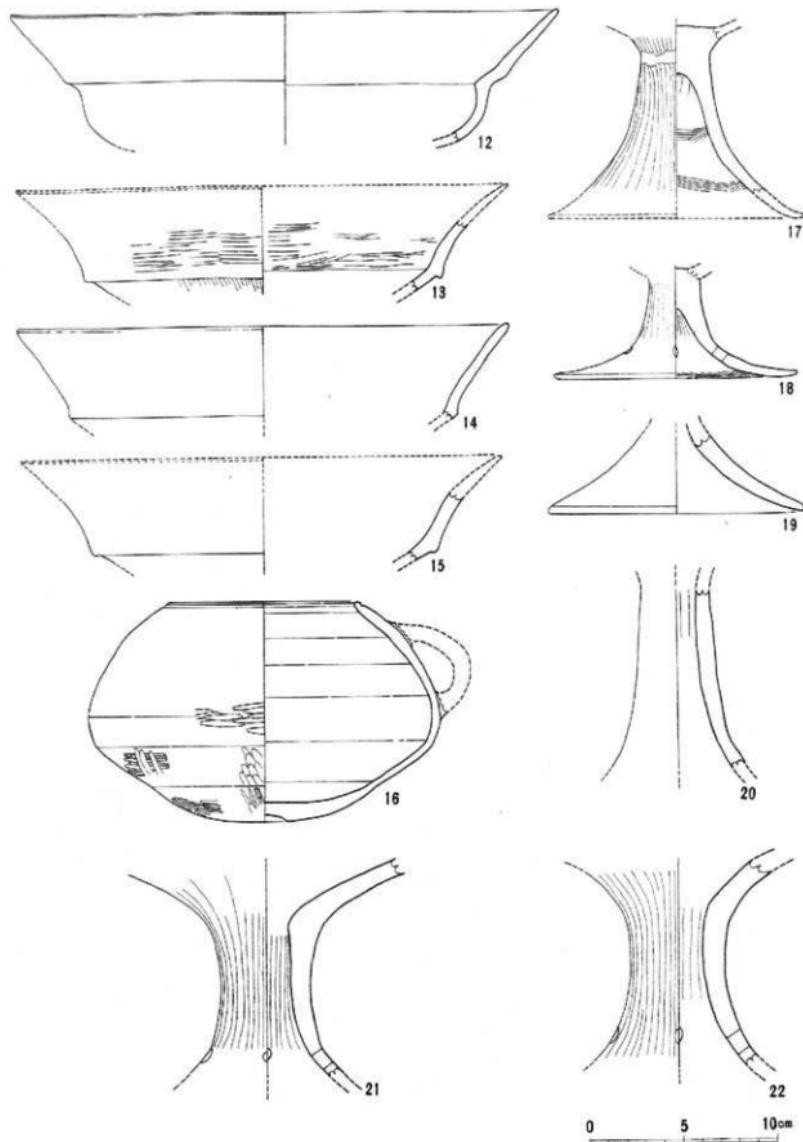
以上述べてきた土器は、一部をのぞいて北陸における土師第1様式に比定できようが、全体にやや古相を呈するグループ（塙崎II式）であるように考えられる。

2. 鉄製品

(註)

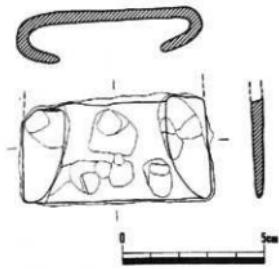
住居址覆土中より出土したもので、いわゆる鍔先状鉄製品と呼ばれるものである。横長の鉄片の両端部を折り返して袋状につくり、木柄等を装着して使用したものと思われる。刃部の幅は6.7cm、総の長さは3.3cmであり、鉄片の厚さは0.5cmを測るものである。袋部の空間は1cm弱であり、ここに木柄等を装着し使用したようであるが、木質部の残存は認められない。これは、本住居址の性格を考えるうえで貴重な出土品であろう。

(註) この種の鉄製品で、北陸での類例は、菅見にふれたかぎりでは金沢市塙崎遺跡で一例ある。



第5図 出土土器実測図2 (1/3)

V まとめ



第6図 鉄製品実測図(1/2)

今回の調査は、史跡環境整備における便所棟建設地を定めるためのものであったが、意外な成果を収めることができ、今後、串田新遺跡を保存し活用するためにも貴重な材料を提供する調査であった。今回検出された遺構遺物をめぐる若干の補足説明を加えて、まとめにかえた。

今回検出された住居址は、古墳時代初期の所産と考えてよいだろう。昭和47年(1972年)は県教委によって行なわれた調査では、古墳時代初期に属する住居址が1棟発見されており、それらの結果から「串田新遺跡の丘陵上中央部には、古墳時代初期の大集落があるものと思われる」(橋本他、1973)と推定された。今回の住居址の発見は、このような推定を一定証明し、内付けするものであろう。

一方、一部のみの検出ではあるが方形周溝墓については、丘陵東側の墳丘墓(方形台状墓?)とほぼ同じ時期の所産であろう。現存している墳丘墓は3基であるが、かつては5基以上あったものと伝えられている。今回検出したような現在では墳丘を明確に有しない方形周溝墓とあわせて丘陵東側は、弥生終末期~古墳時代初期の墳墓群を構成しているように考えられる。

ところが、今回の調査では住居址と溝が重複しており、かなり短い期間内に墳墓の範囲内に住居がつくられたことが注意される。これには、方形周溝墓の築成→墳墓としての意識の希薄化→住居の構築といったプロセスを比較的短期間にたどったことが考えられる。しかし、方形周溝墓の築成時期が明確にできない現在、そのような問題点の指摘に留めておく。

一方、昭和55年(1980年)3月に実施した範囲確認調査では、谷部を挟んで東側台地上(櫛田神社付近)からも古墳時代初期の住居址4棟が検出され、この付近にも該期の集落が営なされていたことが判明した(中山、1981)。このことより、3基の墳丘墓を中心とする墳墓群の形成集団は、単一の集落ではなく、墳墓群を挟んで少なくとも東側と西側の二集落よって構成されていた(註)。これら、串田新遺跡に所在する古墳時代初期の遺構群の位置付けについては、今後解明すべき点が多く有るが、今回の調査での成果と問題点を現在、継続中の環境整備事業の中で活かしていくこととして、ここでは問題提起に留めておきたい。

(註) ほぼ同一時期に所属する墳墓群と集落が、ひとつのまとまりを示し把握された著名な遺跡は、金沢市塚崎遺跡と七ツ塚墳墓群、横浜市大塚遺跡と飛勝土遺跡などがある。

引用参考文献

- ウ 上野章・池野正男 1980 「小杉流通業務団地内遺跡群、第2次緊急調査概要」富山県教育委員会
コ 小杉高等学校地歴班 1952 「串田新遺跡発掘調査報告書」
シ 塩照夫 1964 「生源寺窯址調査報告書」
ト 富山県 1972 「富山県史 考古編」
ナ 中山修宏 1981 「串田新遺跡II、北東地区の範囲確認調査」大門町教育委員会
ハ 橋本澄夫・谷内慶吾司 1974 「金沢市七ツ塚墳墓群、北陸自動車関係埋蔵文化財調査概報」
石川県教育委員会
橋本正・神保孝造 1973 「串田新遺跡発掘調査概報」富山県教育委員会
橋本正・小島俊彰・藤田富士夫 1971 「小杉町中山南遺跡調査報告書」富山県教育委員会
ヨ 吉岡康鶴 1967 「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル 6
吉岡康鶴・小嶋芳孝・田嶋正人他 1976 「塙崎遺跡」『北陸自動車関係埋蔵文化財調査報告書』
石川県教育委員会



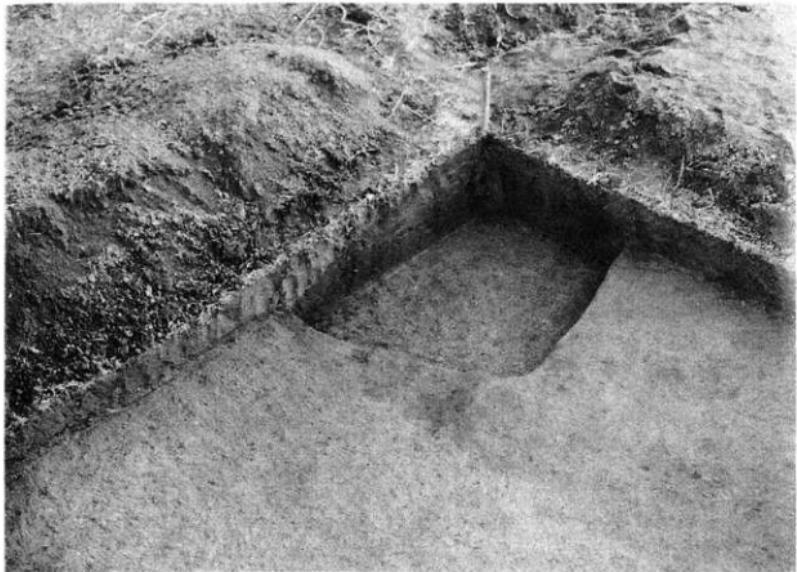
調査区全景(北東より)



竪穴住居址(古墳時代初期)全景



溝状遺構



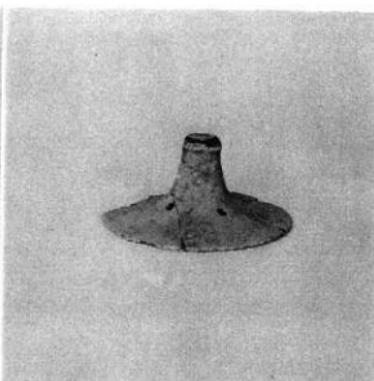
性格不明の土塹



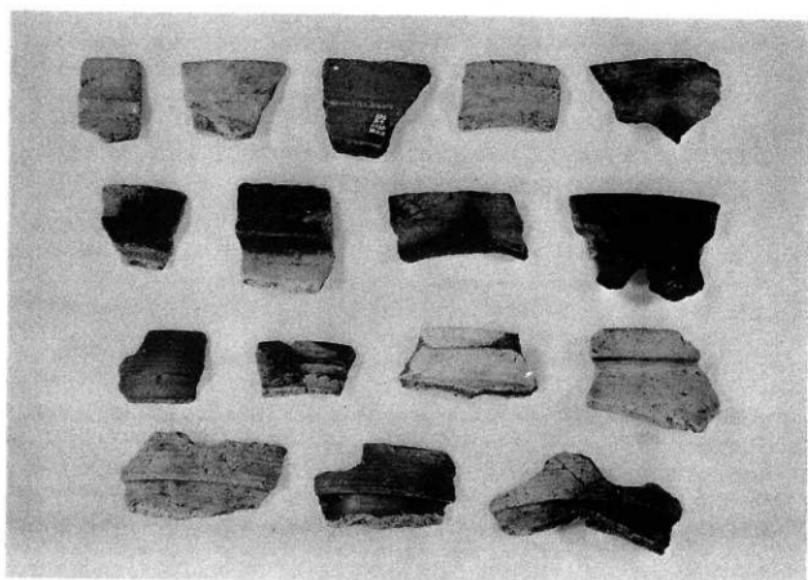
土器出土状況(住居址周溝内)



鉢形土器(第6区)



高环脚部(住居址周溝)



甕形土器(住居址覆土他)

大門町埋蔵文化財調査報告第3集

串田新遺跡 III

—昭和55年度環境整備に伴なう調査—

発行日 昭和55年3月31日

発行者 大門町教育委員会
〒939-02 射水郡大門町大門67

編著者 中山修宏

印刷 カマダ印刷

KUSIDASIN SITE III

Daimon, Toyama Pref.

1981

Board of Education of Daimon
Japan